

ZOCALO 2015 4 ▶ 5

ZOCALO = ソカロはメキシコの都市の広場を意味するスペイン語。埼玉県立近代美術館はアートを通して交流する市民の広場をめざしています。

リニューアルオープン — 新たなる飛躍に向けて

半年ずつ二年に分けて行われた大規模な改修工事もようやく完成し、リニューアルオープンの日を迎えました。空調や照明、収蔵庫など裏方の部分の改修が中心で、観客の方々にとっては（白く輝くトイレなどを除けば）大幅に変わったようには見えないかもしれませんが、これはこれで美術館を正常に機能させるためには不可欠な工事だったのです。またよく見ていただければ外壁のタイルがきれいになったり、展示室の床や天井、壁が新しくなったり、あちこちに手が入っているのがお分かりになるでしょう。



外壁タイル改修後の美術館エントランス(通称「鳥かご」)

しかし劇的に変化したのは、建物内部ではなくむしろ美術館を取り巻く光景の方かもしれません。北浦和公園の植栽にも同時に大幅に手を入れたので、これまでほうぼうと茂る大樹に埋もれた美術館だったのが、今は遠目にも目立つ開放的な見晴らしの良い公園の中の美術館という、随分、明るいイメージになったのに驚かれる方も多はずです。

休館中は暇だったでしょうという声をよく聞きましたが、収蔵庫の整理や目録の整備など、こんな時でなければできない作業を集中的に行ったので、実のところは結構慌ただしい日々だったのです。また館蔵品の名品選やシリーズ作品などを“出開帳”するという県内の他の地域の方々へのサービスが実現できたのも、休館中ならではのことでした。

さて、リニューアルオープン記念展は「private, private—わたしをひらくコレクション」と題して、当館の収蔵品を新たな切り口で紹介するものです。館蔵品展で記念展なんて少し地味じゃないと言われてしまうかもしれませんが、美術館のコレクション＝“パブリック・コレクション”をあえて“プライベート”という概念で捉え直してみせた視点のユニークさに注目していただければと思います。

近代美術館としての王道を行く姿勢と学芸員の創意工夫を生かした斬新な切り口、そしてさまざまな立場の県民の皆様が親しんでいただける開かれた活動。リニューアルオープンを新たなステップにして、この方針のもとに再開される当館のより意欲的な取り組みにご期待ください。

(建畠哲・埼玉県立近代美術館長)

塗師祥一郎さん インタビュー — 未来に遺したい埼玉の風景 —

リニューアルオープン記念のMOMASコレクションIでは、埼玉新聞創刊70周年記念事業「未来に遺したい埼玉の風景—塗師祥一郎展」を開催します。この開催にあたり、塗師さんにインタビューを行いました。



塗師祥一郎さん

— 今回の新作による展覧会はいつ頃から準備されたのでしょうか？

構想からあしかけ3年になります。最初の頃は一昨年亡くなった妻・章子もまだ元気で、取材に同行して手伝ってくれました。県内をずいぶん歩きました。ふだんの制作取材では、いわゆる観光名所などは抜け落ちることが多いのですが、今回は「未来に遺したい埼玉の風景」というテーマですし、著名な景勝地も含めて回りました。はじめて行った場所も結構あります。

— あらためて県内各地を回られて、埼玉の風景をどのように感じましたか？

西部には丘陵や秩父の山々もありますが、平野が広がり眺望が開けたところだと感じましたね。遠く富士山を望めるところもたくさんあります。低地が多く水辺の魅力的な場所も多いですね。川の風景は好きですが多くないで絞りました。偶然出会った風景に今まで気づけなかった面白さを見つけたこともあります。平坦な土地ですから俯瞰するような場所は少ないですね。自然の美しさとあわせて、行田の古墳や杉戸の古民家、見沼通船堀、芝川水門や深谷の煉瓦造りの古い酒蔵など、時の流れが感じられるところにも魅かれました。



行田 丸墓山古墳(制作中の新作)

— 制作にあたって留意されたことは何ですか？

いつもの絵作りでは、樹木のかたちや位置を変えたりとか背景を変えたりとか、かなり自在に風景をいじったりするのですが、こういう制作では嘘はつけない。できるだけ現場に忠実にまとめるよう努力しました。スナップショットのような瞬間の面白さに出会う機会もいろいろありましたが、写真ではなくて絵として遺していくという考えから、全体を見通して捉える傾向が主体になったように思います。長瀬や平林寺、草加の松並木、荒川の土手から遠く新都心を望む風景など、まだまだ描きたいモチーフもたくさんありましたが、今回はそこまでできませんでした。

— 人影の见えない風景に自然とともに生きる人の営みが見え隠れする、雪に閉ざされた世界に春の兆しを見る、というのが先生の作品の大きな魅力ですが、雪景色は何点ありますか？

埼玉は雪の多いところではありません。今回は3、4点というところでしょうか。春夏秋冬、四季それぞれの美しさも埼玉の特色です。作品を通して四季の彩りも楽しんでいただけたらと思います。

(2015.1.30 聞き手：H.T.・M.N.)



北本 北里メディカルセンター付近の雪景(制作中の新作)

「個」と「個」が出会うきっかけに リニューアルオープン記念展：private, private—わたしをひらくコレクション

美術館のリニューアルオープンを飾る展覧会「private, private—わたしをひらくコレクション」は、サブタイトルが示すとおり主に当館のコレクションで構成されます。コレクション展と言えば、2013年に開催した「たまもの—埼玉県立近代美術館大コレクション展」は、32のテーマを設け、出品点数が約1,000点（資料を含む）という、量と多様性で見せる展覧会でした。では、今回の展覧会は？

展覧会を組み立てるときにまず頭に浮かんだのは、リニューアルオープンにあたって、これまでのコレクション形成を振り返りつつ、新しい一歩を踏み出すことを意識した展覧会にしたい、祝祭的にぎやかだった「たまもの」展に対して、ひとりひとりが静かに深く作品と向き合える展覧会にしたい、という思いでした。そして、担当で話し合いを重ねるうちに展覧会タイトルにある「private」という言葉と、当館のコレクションの特色を生かした3つのセクションが結びついていったのです。まずは、核となる3つのセクションをご紹介します。

private passion: 越境者の軌跡—瑛九と須田尅太

須田尅太(1906-1990)と瑛九(1911-1960)はいずれも埼玉県にゆかりがあり、当館のコレクションにとって大切な美術家です。これまでにそれぞれの個展は開催しましたが、二人を組み合わせる展示は初めての試みです。尅太と瑛九が同じ時期に埼玉で活動したことはありませんが、ともに油彩画だけではないジャンルを越えた制作活動を行い、美術家の長谷川三郎から強く影響を受けるなど、共通点が多くあります。同時代を駆け抜けた彼らの作品を並べて展示したときに何が立ち上ってくるのか、ご期待ください。(一部借用作品を含みます。)



瑛九(花)1956年



須田尅太(私の曼陀羅a)1964年

private collection: 蒐集家の眼差—大熊家コレクション

横山大観をはじめ近代日本画の優品がそろった「大熊家コレクション」は、平成19年度にご寄贈いただいた際、大きな話題となりました。今回の展示では、平成25年度に新たに加わった作品を含む51点の全貌を初めて一堂に公開します(＊)。大熊家は川口市元郷地

区で江戸時代から村役人などを務め、江戸末期には「東一味噺」として味噌の製造・販売を手がけた旧家で、日本画のコレクションは9代目の大熊武右衛門(1886-1966)氏が集めたものです。展示室では、作品を慈しんだコレクター・武右衛門の眼差しに思いをはせ、日本画と親しく語り合う空間をお楽しみいただけます。(＊一部の作品は1階展示室に展示されます。)

private vision: 美術家の作法—アナザー・ヴィジョン・サイタマ

最後のセクションでは、当館が断続的に開催してきた展覧会シリーズ「ニュー・ヴィジョン・サイタマ」の歩みを振り返ります。このシリーズは埼玉県ゆかりの活躍中のアーティストを当館の学芸員がリサーチし推薦するもので、1993年から4回にわたって同時代のアーティストを紹介してきました。今回の展示では、「ニュー・ヴィジョン・サイタマ」を契機に当館のコレクションとなった作品を中心に、それぞれの美術家が丹念に深めてきた独自の視点や手法、そして紡ぎ出された表現をひとつひとつ読み解いていきます。



横山大観(漁村曙)1940年

本展は、これらの3つのセクションに、リニューアルにちなんで制作された映像作品によるプロローグ、「private to private」と題するインターセクション(幕間)が共鳴、交錯する重層的な展覧会となります。

ところで、この展覧会のタイトルでは「private」が2回繰り返されています。美術館は、作品を鑑賞する「わたし」が、作品を制作した美術家、あるいは作品を収集したコレクターなどと時代や場所を越えて出会う場所であり、公の場でありながら無数の「個=private」の重なりによって成り立っていると言えるでしょう。今回の展覧会が新たな「private」と出会う場となり、「わたし」の感覚をしなやかに「ひらく」— その契機となることを願っています。

(T.Y.)



佐藤時啓 (Photo-Respirationシリーズより "#369 Saitamakinbi" 1999年(寄託作品))